＜書評＞

矢野敬一　著「家庭の味」の戦後民俗誌
－主婦と団欒の時代－

A5判／ 221ページ　本体価格：3400円2007年5月刊　青弓社

古家　晴美*

Domestic Food Culture in the Age of Modern Family by Keiichi YANO

Harumi FURUIE *

1　本書の概要

近年、民俗学において高度経済成長期の研究が進められている。(2015年　国立歴史博物館研究報告第191集『高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究』、和田健　2012年『協業と社会の民俗学』学術出版会、2011年　国立歴史博物館研究報告第171集『高度経済成長と生活変化』、国立歴史博物館編2010年『高度経済成長と生活革命』吉川弘文館)

本書はその先駆け的な存在である。1993年から2001年にかけて発表した論文に書きおろし論文を加えて2007年に上梓した。青弓社が近代における戦争前後の生活文化や価値観などをまとめた「越境する近代」シリーズの第２巻として刊行したものである。著者である矢野自身は、本書のあとがきで、自著の昭和三部作のうち、第一作目『写真家・熊本元一のメディアの時代　－昭和の記録／記憶』に続く第二作目として位置づけている。

近代家族論を背景として、「主婦」としての新たな性別役割を求められた農村女性のありようと、それが家族や農村生活にどのような影響を及ぼしたかについて論じた前半部（１～３章）と、一家団欒を求める「家庭」意識の醸成とそれに関わる年中行事の変容についてまとめた後半部（４～５章)、そして、現代における都市との関係の中で再編成された「地方の食」と「主婦」･「家庭」との関わりを記した最終章（６章）から成る。全体の構成は次の通りである。

序
第１章　ふるさとの味をめぐる戦前　－高度成長期前史の農村女性
第２章　「主婦」役割の編成と味噌自家醸造法の改善指導
第３章　調理の習得とリテラシー　－「主婦」役割の受容と「家庭」意識
第４章　旧正月から新正月へ　－「家庭」中心の年中行事への移行
第５章　お盆の戦後　－帰省ラッシュ・成人式・盆踊り
第６章　「名物」の味／「家庭」の味　－端

＊　筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

午の節句と笹団子
あとがき
索引

2　主な論点　－高度成長期の農村社会と近代家族

本書は高度成長期の農村社会の変容を「近代家族」、特に「主婦」と「家庭」に注目し読み解いた研究書である。新潟県最北の町、山北（さんぽく）町でのフィールドワークで収集した資料に基づき論じている。

第１章の「ふるさとの味をめぐる戦前－高度成長期前史の農村女性」では、戦前・戦中期にメディアやプロパガンダを介し、「近代家族」の概念、とりわけ「主婦」の性別役割が、「新農村料理」「郷土食」の名目で農村部の家内領域に持ち込まれたものの、実現への道のりは遠かった当時の状況についてまとめている。昭和初期の『家の光』誌上で紹介された「新農村料理」は、栄養学的観点から考案された。著者はこれを「農村女性」に向けられた都市新中間層の近代家族における専業「主婦」と同様の性別役割への期待である、と分析している。その後、戦局の悪化による米不足で、白米の「代用食」として脚光を浴びた「郷土食」は、全国的規模の食糧調達システムの末端に位置づけられ、国家総動員体制が家内領域にまで及ぶ。しかし、このような外部からの「主婦役割」の要求は、過酷な肉体労働（農作業や様々な家事）に従事し経済的なゆとりも欠如していた戦前・戦中期の農村女性にとって、実現困難なものであった。

農村女性と主婦役割の関係性に大きな進展がもたらされたのは、高度成長期に入ってからのことである。第２章「「主婦」役割の編成と味噌自家醸造法の改善指導」では、生活改良普及員の指導の下、味噌の醸造法を大幅に改善し、農村女性が過重労働から解放されたプロセスが描かれている。味噌玉を作らない麹による仕込み法に切り替えることにより農繁期と重なる仕込み時期をずらし、減塩や味噌の熟成期間の短縮、ビタミン・カルシウムの添加などの改良を施し、「栄養」「健康」「衛生」に気遣う「主婦」としての家族への配慮・自意識と言うものが、農村女性に芽生える。また、普及員の指導により、生活改善実行グループが結成され、自給やその食品加工活動を通し、高度成長期の豊かな消費生活を享受する一歩が踏み出された。これらの活動を通し、「主婦」役割の規範が提示され、村内での家格を示す公的なシンボルであった味噌は、「家庭の味」としての家内領域の問題に取り込まれて行く。

第３章「調理の習得とリテラシー」では、前世代まで行ってきた「見習ひ聞き覚え」による伝承から、文字を介した情報伝達への移行が、農村女性の「家庭」への関心を喚起する回路の掘り起こしに繋がった点に注目している。家計簿や生活記録に止まらず、味付けや調理法の工夫を書きとめた「おかず帳」の作成によって、開かれた知のありよう、情報の共有が実現した。高度成長期における農家の所得・生活水準向上に後押しされ、未知の食材や調理法を取り入れながら、その時期の自分の「家庭」の嗜好にあった味へと更新され、食事内容も多様化した。都市と異なり、農村では女性は専業主婦化しなかったが、性別役割分業に依拠した主婦役割意識が波及した。

４章と５章では、「主婦」役割の編成と表裏一体をなす「一家団欒」への希求の問題へと目を転ずる。明治の改暦以降、長らく続いた新暦と旧暦の併用が、一気に新暦に一本化されたのは昭和30年代の高度成長期であった。就職や進学による都市への地理的・社会的移動やマスメディアの波及により、全国的な基準を受け入れざるを得なくなった。そして、都市へ流出した人々は、新暦の正月・盆にふるさとを目指し、「帰省ラッシュ」と言

う言葉が登場した。その背景には、暦に従った年中行事の遂行よりも、「家庭」中心の楽しみ・「一家団欒」を優先させる近代家族的価値観の優位が伺われる。第４章「旧正月から新正月へ」では、正月行事の簡素化と期間短縮は、一家団欒の実現化に向け女性過重労力負担の軽減を意図し遂行された、と考察している。また、戸別の年始回りは集落での一統礼に集約され、他人を交えずに帰省した家族との水入らずの正月を楽しむ環境が整えられた。儀礼性を重視した行事食も家族の好みを優先した重詰めへと移行し、公的側面の強い正月行事は、家庭中心の楽しみを重んじる私的行事の方向へ方向転換したことを論証している。

第５章「お盆の戦後」では、盆行事を構成していた墓参りが、夏休みの帰省の際に行楽の一環として再編成される様子やお盆の帰省者の都合に合わせ夏に移行した成人式について記している。また、この時期に性的・暴力的要素を排除し健全なレクリエーション化した盆踊りを、身体を通した「民主化」を実現するための営みとして位置づけている。

最後の第６章「「名物」の味／「家庭」の味」では、端午の節句の行事食として「笹巻き」を作って来た山北町で、町の外部で「越後名物」として紹介された「笹団子」が逆移入され、行事食化し笹巻きと併存するようになったようすを取り上げている。新潟県の一部の行事食であった「笹団子」が全国版郷土料理書などで「越後名物」として紹介され、高度成長期に「米どころ新潟」のイメージを背景に県全域に端午の節句の食として波及した。「地方の食」へ投げかけられた眼差しが、時間的・経済的ゆとりができた高度成長期において、いかに再編成されて行ったのか、「主婦」の性別役割の規範化の関連性を追いつつ解明している。また、菖蒲の節句行事に関しても、家庭中心に行う行事食や菖蒲湯等が健在なのに対し、集落共同で行う菖蒲叩き等の行事が衰退し、「家庭」中心に行う年中行事が中心的存在になっていることを指摘している。

3　本書の特色・意義と課題

本書の最大の特色・意義は、「農村」と言う文脈の中で、「近代家族」概念の波及が「高度成長」によってもたらされたことを日常生活の実証的分析に基づき論証した点にあると考える。「主婦」概念に焦点を絞りジェンダーの視点から分析した研究の大半は、近代日本で産声を上げた明治大正期の＜都市新中間層の専業主婦＞の様態を分析対象としてきた。その大衆化についての研究は経済的尺度から庶民層への波及に留まり、昭和の高度経済成長期における≪農村部の主婦≫の性別役割規範について具体例を挙げながら分析したものは管見の限りではほとんど見受けられない。本書は≪農村部≫の「主婦」の価値観の変容について注目した嚆矢として位置づけられる。

第２の特色は、農村部における「主婦化」の過程の特徴として、専業主婦化せず「主婦の性別役割意識」が波及した点を具体例に基づき浮き彫りにした点が挙げられる。そして、第３に高度成長（農家の農外所得や生活水準の向上）がそれを後押ししたことを明示した。その他にも、「家族」や「地域」の変容を描く表現手段として「郷土食」「みそ」「調理ノート」「笹団子」などモノを対象とした物質的なアプローチも本書の特色の１つとして挙げることができる。また、著者自身が述べているように、従来のジェンダー研究において、女性の性別役割の固定化に関しては負の部分、夫婦の断絶・夫婦の疎外感、が強調されてきたのに対し、著者は民主化に伴う「女性の解放」と言う正の視点からの事例も多く紹介している。これらの分析は、この分野の研究に大きな進展をもたらしたと言えよ

う。

上述したように、本書は民俗学上、多くの意義を有すが、気になった点について触れておきたい。第１に、山北町における味噌製法改善指導で大成功をおさめた背景の分析が十分になされていない。著者は指導に当たった生活改良普及員の昭和38年の『記録簿』に基づき、町内全地区にわたり味噌の改善指導がほぼ完了した旨を報告している。（P74）しかし、昭和48年１月に農林省大臣官房総務課により編集された『農林行政史　第十巻』によれば、Ca 強化味噌などの食生活改善の全国レベルの普及度は、29.2パーセントとなっている。山北では、どうしてその10年前に町全体の改善を成し得たのか、その要因が見えて来ない。これは本書の中で、生活改善事業全体が相対化されていないことと関わる。生活改善は、農林省、総務省、文科省、厚生省など多重的に実施され、第２章で取り上げた味噌自家醸造法の改善普及活動は、農林省主導による生活改善普及事業の一環として位置づけられる。農業改良普及所を拠点とし指導に当たった生活改良普及員（女性）の人数は、同事業内の農業改良普及員（男性）に比べ５～６分の１であった。そのため、広範な担当地区内で普及対象となる地域・グループ数を限定した「濃密指導方式」が採用された。味噌改善の全国的な普及度が３割弱に止まったのはそのような事情がある。他地域との比較の上で、山北の成功の理由を解明する必要があるのではなかろうか。

第２に、著者は「本書で用いる「主婦」は、民俗学での主婦権と言う用語とは無関係なものとする。」（P22）（以後、傍線は評者による。）と述べている。しかし、近代家族の「主婦」と、それが波及する以前の家族における「カカ」・「アバ」とは、同居し、併存した過渡期も存在した訳で、両者の力学に関する分析が求められるのではなかろうか。『山北町の民俗４　社会』（筑波大学さんぽく研究会編　1985年　山北町教育委員会発行）によれば、結婚後の女性は、「アネ」と呼ばれ、子供が出来ると夫や舅・姑からは「アバ」、子供を含めたその他の人々からは「カカ」と呼ばれる。カカ・アバは同時に主婦＝家長の妻を示す場合もあると言う。カカは、田植え、草取り、稲刈り、脱穀など夫婦の共同作業では、家長を補佐する役目につくことが多いが、日常食や行事食、漬物や味噌などの保存食の準備や自給用野菜の栽培、肥作りとその運搬、洗濯、掃除、薪とり、山仕事の段取り、家畜の世話、家族の衣類・寝具などの準備や管理、日常的な交際など生産・消費生活を支える労働の大半を担当した。

確かに柳田国男が想定する主婦の役割・概念は、福田アジオや倉石あつ子が指摘するように、家長を補佐しその行動を円滑にする副次的役目に過ぎず、1930年代と言う特殊な時代背景の下、銃後を守る女性意識の啓蒙と戦意高揚と言う政治的配慮の下にまとめあげられた感は否めない。また、著者の「生産活動と消費活動とが未分離の状態に・・・（おいて、）・・・独自の家内領域を持つ「主婦」役割自体、成立しようもない」（P50）と言う指摘も当然のことである。このことから、分析概念のレベルにおける主婦権と近代家族における「主婦」の関係性の否定は妥当である。

しかし、実態レベルにおけるダイナミズムの分析に関しては、やや物足りなさを感じる。著者は「戦前にはすでに存在した近代家族の理念が戦後、特に高度成長期の農村部でいかに実現し、それは年中行事や家庭のあり方をどのように変えていったのか」（p21）の実態にこだわっている。第３章のリテラシーを通して「主婦」がいかに変容していったかのプロセスの描写は、秀逸であり資料としても貴重なものである。が、その当時に「主婦」と併存していたであろう家族の近代化の波に乗り遅れた「カカ」・「アバ」との関係性について明瞭に示されていない。その関係性を抽

出することが、当時の時代性を語る上で不可欠ではなかったかと考える。

以上、高度経済成長期に関する研究の一助となればと考え、先駆的研究を振り返ってみた。

参考文献

倉石あつ子
1988年「柳田国男の主婦観」『長野県民俗の会会報』11
国立歴史民俗博物館編
2010年『高度経済成長と生活革命』吉川弘文館
国立歴史民俗博物館
2011年　研究報告　第171集『高度経済成長と生活変化』
国立歴史民俗博物館
2015年　研究報告　第191集『高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究』
筑波大学さんぽく研究会　編
1985年『山北町の民俗４　社会』山北町教育委員会
農林省大臣官房総務課　編
1973年『農林行政史　第十巻』農林省大臣官房総務課
福田アジオ
1989年「柳田国男における歴史と女性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第21集
和田　健
2012年『協業と社会の民俗学』学術出版会